

# トーク番組3形態のコミュニケーションの特徴と参与者の関係性

## ーパブリック・ディスコースにおけるターンテイキングのー考察ー

北澤茉奈(慶應義塾大学大学院生)

### 1. はじめに

COVID-19の感染拡大に伴い、大人数で・密に・場を共有して行われるコミュニケーションが避けられるようになった。距離や時間の制限を超えて人々を繋いできたオンライン会議システムやテレビ電話は今や、普段から対面でやりとりをする相手との間でも使用されるようになってきている。しかしその有用性が注目される一方で、ズーム疲れ(Zoom fatigue)が多くの記事で取り上げられるなどオンラインでのやりとりに違和感を覚え疲弊する人が増えてきている。

そこで本研究では、こうしたコミュニケーション形態の違いが人々の言語活動にもたらす変化を、ターンテイキングの営みから明らかにすることを試みる。ターンテイキングの研究は、制度的会話だけでなく自然発生的な会話にも組織化された話者の交替システムがあることを明らかにしてきた(Sacks et al., 1974; Schegloff, 2000)。また、ターンテイキングを参与者の関係性と結びつけて、交替のタイミングやターンの長さ、保有数などから参与者間の力関係や相互の理解度を分析する研究も行われている(Benus et al., 2011; Tannen, 1998)。

本研究では、組織だった営みとしてのターンテイキングが、コミュニケーション形態が異なる場合にどのように行われ、またそれが参与者の関係性にどのような影響を与え得るのかを分析する。COVID-19の流行に伴い収録方法が変更されたトーク番組の3形態(スタジオ[観覧客あり]、スタジオ[観覧客なし]、オンライン会議システム)を対象とし、ターンの交替に要する時間(交替潜時)および交替頻度、参与者それぞれのバック・チャンネルの使用率をもとに比較を行った。

### 2. データと方法論

アメリカNBCで放送されているトーク番組*The Tonight Show Starring Jimmy Fallon*および*Late Night with Seth Meyers*から、それぞれのYouTube公式チャンネルに公開されているインタビュー部分を対象とする。どちらの番組も、2020年3月末からオンライン会議システムを用いてゲストにインタビューを行っている。スタジオで行われるインタビューに関して、*The Tonight Show Starring Jimmy Fallon*では、COVID-19の流行の過渡期に観覧客なし<sup>2</sup>でのインタビューが2回行われていた。それも含めて本研究は以下のデータセットを用いて分析を行う。

表1 本研究で使用するデータセット

形態	司会者	ゲスト	データ ID	発話時間
1. スタジオ(観覧客あり)	Jimmy Fallon	Nicole Richie	[JF_NR_A]	3:45
		Mandy Moore	[JF_MM_A]	3:38
		Dane DeHaan	[JF_DD_A]	4:30
		Kathryn Hahn	[JF_KH_A]	2:43
	Seth Meyers	Mandy Moore	[SM_MM_A]	3:51
2. スタジオ(観覧客なし)	Jimmy Fallon	Mandy Moore	[JF_MM_N]	5:17
		Dane DeHaan	[JF_DD_N]	3:51
		Nicole Richie	[JF_NR_O]	7:52
3. オンライン会議システム	Jimmy Fallon	Kathryn Hahn	[JF_KH_O]	5:33
		Seth Meyers	[SM_MM_O]	6:39

<sup>1</sup> 日本語では「あいづち」と訳されることが多いが、本研究では、現話者のターンの進行を妨げることなく反応を示す発話として、*uh-huh, right, yeah* (Taboada, 2006)以外に司会者や観覧客の拍手や笑いなど(Lakoff, 1982)も含めてバック・チャンネルと呼ぶことにする。これはターンとは区別して扱われる。

<sup>2</sup> 観覧客はいないが、少数のスタッフやハウス・バンドのThe Rootsは同スタジオ内にいる。

ゲスト個人の特徴に左右されないよう、可能な限り司会者とゲストは共通で放送形態のみが異なるものを採用した。書き起こしたデータ<sup>3)</sup>には質的データ分析ソフトウェアMAXQDAを用いてコード付けを行った。司会者およびゲストの「ターン」、「ターンテイキングに要した時間(交替潜時)」、「バック・チャンネル」をコードとして手動で付与していき、各コードの頻度やコード間の関係を量的に示し比較分析を行った。

### 3. 結果

#### 3.1 交替潜時

参与者同士の関係性や一体感との関連が指摘されている交替潜時について、0.1秒ごとに計測を行い、重複や発話が密着している場合も含めて表2に示した。0.1秒以上は形態ごとの特徴が見出しやすいように6つの間隔でまとめている。

表2 トーク番組3形態のターンテイキングにおける交替潜時の割合

	2.0-3.0	1.6-2.0	1.0-1.5	0.7-0.9	0.4-0.6	0.1-0.3	密着	重複
スタジオ(観覧客あり)	1%	1%	0%	2%	8%	28%	22%	37%
スタジオ(観覧客なし)	1%	1%	1%	3%	7%	29%	25%	35%
オンライン会議システム	0%	3%	9%	10%	22%	24%	5%	27%

対面という要素を共有するスタジオでの2形態とオンライン会議システムとの間において、「密着」と0.4秒以上の交替潜時の割合に特に違いが現れた。オンライン会議システムにおいて「密着」は5%にとどまり、スタジオの場合と比べてその割合は低い。(1)はスタジオ(観覧客なし)の例であるが、28行目と29行目においてゲストと司会者はそれぞれ間を置かずターンを交替している。しかし、(2)のオンライン会議システムの例では、司会者の質問に答える形での交替に0.5秒(182行目)、その後司会者がゲストの回答に反応する形で行われた交替に0.6秒かかっている(184行目)。

##### (1) [JF\_DD\_NA]

27 JF: That's Bowie, is that right?=  
 28 DD: =Bowie, yeah=  
 29 JF: I remember that name.

##### (2) [JF\_NR\_0]

181 JF: It's on Quibi. How many episodes are there?  
 182 NR: (0.5) There's six episodes on Quibi, and then,  
 183 at the end of each episode is a new song and music video.  
 184 JF: (0.6) Dude, you can rap. You're unbelievable.

高木他(2016)が通常の発話の間隔を0.1秒またはそれ以下としていることや、Benus et al. (2011)が共通基盤の理解の度合いが高いことを示す潜時の臨界点を0.3秒と主張していることをふまえると、オンライン会議システムにおける交替潜時は不自然で協調関係を築きにくいものと考えられる。スタジオにおいても1秒以上に及ぶ長い潜時を伴う交替もあるが、それは観覧客(または司会者)の笑いや歓声などによって進行が妨げられたり、現話者の発話が予想外に途切れたりした場合などである。しかしオンライン会議システムでは、(2)のように質問への返答といった隣接応答ペアにおいても1秒以上の潜時を伴う例が散見された。これらの不自然な潜時の出現には、オンライン会議システムというツール上の特徴が原因となっている可能性がある。実際、Mintzberg(1973)は、ビデオ会議と対面での会議を比較し、ビデオ会議で自然な会話の流れが生まれにくい理由の1つに、画面に映る相手を見て話すときとカメラ

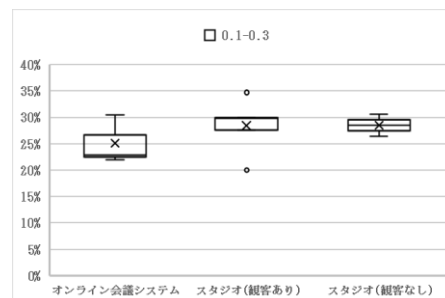


図1 潜時「0.1-0.3」秒におけるゲストごとの割合

<sup>3)</sup> トランスクリプト記号

「?」 質問 「=」 発話の密着 「[」 重複 「.」 語尾の音調が下がっている場合 「,」 続きがあることを予測させる場合 「@」 笑い 「(0.0)」 0.1秒以上の沈黙

に目線が合わずアイコンタクトが出来ないことを指摘している。

潜時ごとの割合が類似していたスタジオ2形態について個々の結果をみると、スタジオ(観覧客あり)では「0.1-0.3」と「密着」においてゲストによって割合に差があることが分かった(図1, 図2)。その点、スタジオ(観覧客なし)やオンライン会議システムでは、スタジオ(観覧客あり)ほどゲストごとの違いはみられなかった。

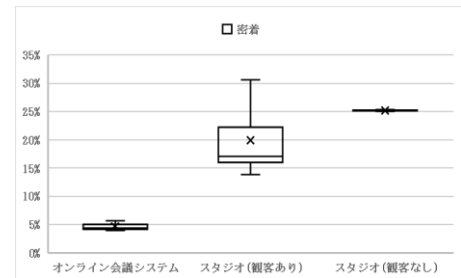


図2 潜時「密着」におけるゲストごとの割合

### 3.2 ターンテイキングの頻度

トーク番組の形態ごとに1分間で行われるターンテイキングの頻度を示したものが表3である。表3の結果から、オンライン会議システムは1分間で5.5ターンと少なく交替の頻度が最も低いのに対し、スタジオ(観覧客なし)はその3倍の16.5ターンで頻繁にターンテイキングが行われていることがわかる。このことは、オンライン会議システムとスタジオでのトークにおいて、各ターンの平均的な長さに差があることを示唆する。

表3 トーク番組3形態におけるターンテイキングの頻度

	総秒数	総ターン数	1分間のターン数
スタジオ(観覧客なし)	548	151	16.5
スタジオ(観覧客あり)	1107	281	15.2
オンライン会議システム	1204	111	5.5

番組内での役割の違いによって司会者とゲストのターンの長さは異なり(Benwell & Stokoe, 2006), さらにトーク全体を通してその長さは変化するものと考えられるが, 少なくともこの平均的な値からは, スタジオでは短く単発的なやりとりが, オンライン会議システムでは一方が他方の話に耳を傾ける形でやりとりが行われていると推測できる。実際, (4)のオンライン会議システムの例では, 司会者が1-3行目で質問した後4行目以降はゲストのターンが続いている。この間, 司会者は笑って反応することによりターンの交替は行われていない。一方, スタジオ(観覧客なし)では, 前の発話に重複する形で頻繁に司会者とゲストがターンを交替していることが分かる。

#### (4) [JF\_KH\_0]

01 JF: Kathryn Hahn, thank you so much for being here.  
 02 We really, really appreciate it. You look great.  
 03 Where are you? And how are you? And who are you with?  
 04 KH: (0.7) I, I'm with no one but, but the voices in my own mind.  
 05 I, I'm in my garage right now because it is the quietest place,  
 06 JF: @@@[@@@  
 07 KH: [Ahh, in the house and I don't want to, I don't want to interrupt the multiple 08  
 schools that are happening online in the house.

#### (5) [JF\_MM\_NA]

57 MM: And they would pass out cassettes. Remember cassettes, [guys?  
 58 JF: [Yes, of [course.  
 59 MM: [They would  
 60 pass out my exactly, [yeah.  
 61 JF: [Questlove, yeah, [cassettes  
 62 MM: [they would @@@@ would pass out

(4)の6行目でみられる司会者の笑いは, 話し手であるゲストのターンを妨げることなしに相手に聞いていることを示すバック・チャンネルとして機能している。表4は, それぞれの形態で集計されたバック・チャンネルのうち, 誰がどのくらい使用したのかを示したものである。バック・チャンネルの割合が高いことは, 相対的に聞き手としての役割を担っていることを示唆する。通常の形態であるスタジオ(観覧客あり)においては, ゲストのターンに対する司会者(41%)と観覧者(26%)のバック・チャンネルの割合がゲストが司会者に使用する割合(20%)よりも高く, 司会者が観覧客とともにゲス

トの話に耳を傾けたり反応したりする傾向にあることが分かる。オンライン会議システムでは、観覧客がいない分、司会者(79%)とゲスト(21%)の差がより顕著に表れ、話し手としてのゲストと聞き手としての司会者という役割の違いがより明確になっている。一方、スタジオ(観覧客なし)では、その割合が逆転し、ゲスト(61%)の方が司会者の話の聞き手としての役割を担っていることが分かった。

表 4 バック・チャンネルにおいて各参加者が占める割合

	観覧客	司会者	ゲスト
スタジオ(観覧客なし)	0%	39%	61%
スタジオ(観覧客あり)	39%	41%	20%
	(13%が司会者, 26%がゲストの発話に対して)		
オンライン会議システム	0%	79%	21%

#### 4. 考察

トーク番組の3形態について、交替潜時やターンテイキングの頻度、バック・チャンネルにおける各参加者の割合をもとに分析を行った。オンライン会議システムでは、通常の形態とは異なり、自然な潜時での交替が実現できず、即興的に互いが掛け合うやりとりが減り、司会者はゲストの話の聞き出しそれに耳を傾ける聞き手としての役割を強めていることがわかった。一方で、スタジオでは観覧客の有無を問わず自然な交替潜時でターンテイキングが行われ、どちらかが聞き手または話し手に偏ることなく高い頻度で交替が行われていることが分かった。しかし、バック・チャンネルだけに焦点を当ててみると、スタジオ(観覧客なし)は他の2形態と異なり、ゲストによるバック・チャンネルの使用が増え、一般的なインタビューにみられる聞き手としての司会者と話し手としてのゲストという関係性が逆転していることがわかった。これは、観覧客のいない対面のやりとりでは、インタビューという形式的な側面への意識が薄れ、司会者も積極的に話に参加した結果生じたものと考えられる。スタジオ(観覧客あり)では交替潜時の使用においてゲストによるばらつきがみられ、司会者だけでなく観覧客の反応をもとにその都度微妙な調整が行われているものと考えられる。

#### 5. おわりに

トーク番組3形態におけるターンテイキングの営みの比較を通して、同じインタビュー形式でも形態が異なれば参加者同士のやりとりが変化することが明らかになった。特に、トーク番組のインタビューにおいては、オンライン会議システムの使用や観覧客の有無がそこで行われるコミュニケーションや参加者の関係性に影響を与えている可能性を指摘した。今後は、より多くのデータを収集し、ジェスチャーやプロソディーなどを踏まえた複合的な分析をしていきたい。また、ターンテイキングにとどまらず形態ごとに話題展開がどのようになされるかなど内容面についても分析を進め精査していきたい。

#### 参考文献

- Benus, S., Gravano, A., & Hirschberg, J. (2011). Pragmatic aspects of temporal accommodation in turn-taking. *Journal of Pragmatics*, 43(12), 3001-3027.
- Benwell, B., & Stokoe, E. (2006). *Discourse and identity*. UK: Edinburgh University Press.
- Mintzberg, J. (1973). *The nature of managerial work*. NY: Harper & Row.
- Lakoff, R. (1982). Persuasive discourse and ordinary conversation, with examples from advertising. In D. Tannen (Ed.), *Analyzing discourse: Text and talk* (pp. 25-42). Washington DC: Georgetown University Press.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn taking for conversation. *Language*, 50(4-1), 696-735.
- Schegloff, E. A. (2000). Overlapping talk and the organization of turn-taking for conversation. *Language in society*, 29(1), 1-63.
- Taboada, M. (2006). Spontaneous and non-spontaneous turn-taking. *Pragmatics*, 16(2-3), 329-360.
- 高木智世・細田由利・森田笑 (2016). *会話分析の基礎* ひつじ書房
- Tannen, D. (1990). *You just don't understand: Women and men in conversation*. NY: William Morrow.